



本 店

発刊にあたって

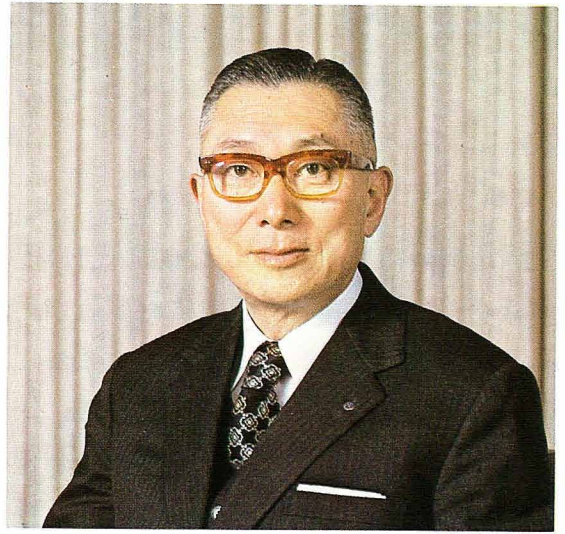
昭和48年11月2日、当行は創立100周年を迎え、ここに『第四銀行百年史』を刊行するはこびとなりました。

当行が、本邦銀行界の先駆けとして、百年史を刊行する榮譽をになうことができましたのも、永年の間、変わらぬ信頼をお寄せくださいました皆様、なみなみならぬご愛顧のたまものと、深く感謝申し上げる次第であります。

顧みますと、当行は、明治6年、国立銀行条例に基づく第四国立銀行として、ここ新潟の地に設立され、明治29年、国立銀行の営業満期により、普通銀行に改組して株式会社新潟銀行と商号を改め、次いで大正6年、旧称にちなんで第四銀行と改称して、今日に至っております。

この間、1世紀にわたるわが国の歴史は、きわめて波瀾に富み、新潟県経済も、多くの変転を経ながら発展してまいりました。明治から大正、昭和と多数の銀行の興亡が繰返され、そのたどってきた道は険しく、厳しいものがありましたが、当行は、健全銀行主義の方針を貫き、いささかの揺るぎもなく、県下の銀行多数を合併しながら、地域社会とともに成長を続けてきました。太平洋戦争末期に、県内銀行界は、現存する2行に統合されましたが、当行は、県内の中心銀行として、戦後の苦難の時代を克服し躍進を重ねて、はや30年になろうとしております。

100周年を迎えるに際して、この地域社会とともに発展してきた姿を明らかにし、歴史にとどめて次の世代に引継ぐこともまた、われわれの責務の一端であらうと



思います。当行はさきに『第四銀行八十年史』を刊行しておりますが、このたび稿を改め、経営史としての視点から先人の足跡をたどり、さらに金融史の側面から県内金融機関の動向を探り、新たな資料を加えて『第四銀行百年史』としてまとめた次第であります。

本史の編纂に当たり、東京大学教授、経済学博士 加藤俊彦氏から、懇切なご指導、ご監修の労を賜りました。また、県内各地の多数の方々のご熱心なご奔走により、貴重な資料を入手することができ、当行の役職員やそのご遺族の方々からも、多くのご教示をいただきました。ここに記して、厚くお礼申し上げます。

私どもは、100周年を創業の年に置換え、新たな1世紀に向かっていっそうの飛躍をはかりつつ、地域社会発展のため、あげて金融機関の責務を果たす所存であります。本史が、次の世紀をになう役職員各位の糧となり、あわせて、いささかなりとも皆様のご参考とならんことを願ひいたしまして、刊行の辞といたします。

昭和49年5月

頭 取 鈴木正二

監修を終えて

1971年の初夏のころ、私は、第四銀行より『第四銀行百年史』の刊行につき相談を受け、あわせてその監修を依頼された。私としては、若干の助言をする労はもとより惜しまないが、監修というのは責任があまりに重く、到底その任にたえない、という気持が強かった。しかし、再三のご依頼に心を動かされ、結局お引受けすることとした。それというのも、私自身、日本の銀行の嚆矢ともいべき第四銀行に、多大の関心と興味を抱いていたからにはほかならない。

ところで第四銀行は、周知のように、すでに浩瀚な『第四銀行八十年史』を1956年に刊行している。そこで、『百年史』の刊行に際しては構想を新たにすることとし、まず視野をひろげて、ひろく日本の経済・金融の発展、なかんづく新潟県経済・金融の発展をも考察の対象とし、それらの歴史的発展のなかで、第四銀行がいかなる地位を占め、いかなる役割を果たしたかを究明することとし、さらに、それと同時に、経営史的視点から内部資料を使って同行の経営的特質を明らかにすることを企図した。以来、3年有余、執筆者の諸氏は多大の努力を払って埋没した資料を発掘し、先輩・古老のヒヤリングを行ないつつ執筆をすすめた。とりわけ、合併銀行の資料蒐集には、県下のすみずみまでまさしく足を棒にして歩き回る努力が続けられた。それらの努力が実ってここに上梓のはこびに至ったことは、まことに慶賀にたえない。

監修者としての私は、たんに草稿を読み若干の助言などを行なったにすぎないが、しかし、この監修を通じ、私自身は多くのことを学び、益するところすこぶる大であった。その若干の例をあげよう。第四銀行は農業県である新潟県に誕生し、その設立に大地主が参加していることから、一般に地主銀行であるとの理解が多かった。この理解は全く間違っているとはいえないにしても、もし地主銀行という言葉のうちに、地主の土地を担保とする、地主に対する金融を中心とする銀行、という意味を含ませるとすれば、それは多分に修正を要することとなる。本書は、同行が明治・大正期を通じて土地担保金融を極度に抑制し、事実、一般の地方銀行に比べてその比率が少ないこと、同行の業務の中心は、むしろ新潟市を中心とする、米商人や米商会所に対する商業金融におかれていたことを実証的

に明らかにしている。なお、これと関連して、アラン・シャンドによって伝えられたサウンド・バンキングの理念が、比較的大規模の地方銀行の発展過程のなかでいかに滲透し、また、時代の転換とともにそれがいかに変容していったかを、本書は、第四銀行の経営史的発展を究明することを通じて明らかにしている。

また、よくいわれることであるが、日本では農村に長く前近代的な諸関係が残存したため、農村地帯の資金と大都市区域の資金とはその性質を異にする、という問題がある。同行はその草創期から東京支店を設置したが、本書は東京支店の諸勘定を分析し、新潟地方の資金と東京地域の資金との交流関係を明らかにすることによって、前記の問題に照明を与えている。なお、このほか、合併銀行史に関する叙述は、日本の銀行合同の中核をなす、いわゆる地方的合同の具体的内容を知るうえに貴重な資料となっている。

こうしたことから、私は、本書が第四銀行関係者によって、同行の歴史を顧み、あわせて将来を展望するために読まれるばかりでなく、ひろく経済史や金融史の研究者によっても読まれることを期待する。

本書は、亀沢前頭取のときに企画され、鈴木頭取の時期に完成した。編集を進めるに際して、5人の編集委員が任命され、常務会で編集の大綱方針が樹立されたのち、細かいことはすべて編集委員にまかされた。編集委員は、田中孝、大川健、中原睦雄、里村進、内藤美恵子の諸氏であるが、よく一致団結し、田中氏を中心に共同討議を行ない自由に健筆をふるった。私は、首脳部の諸氏の潤達な方針と、執筆者諸氏の精励に深甚な敬意を表する。

1974年5月

東京大学社会科学研究所の研究室にて

加藤俊彦





県都・新潟市と越後平野

創立100周年祝典



上 頭取挨拶
左 職員代表
誓いのことば
右 祝 宴



現 役 員





左頁

前列右より

取締役頭取 鈴木 正二

取締役 白 勢 誠一

専務取締役 内 藤 豊作

常務取締役 熊 倉 一郎

常務取締役 津 野 進平

後列右より

監査役 川 村 欽治

取締役 小 柳 傳作

右頁

前列左より

取締役 等々力 英男

専務取締役 佐々木 栄一

常務取締役 市 嶋 融

常務取締役 谷 和 雄

後列左より

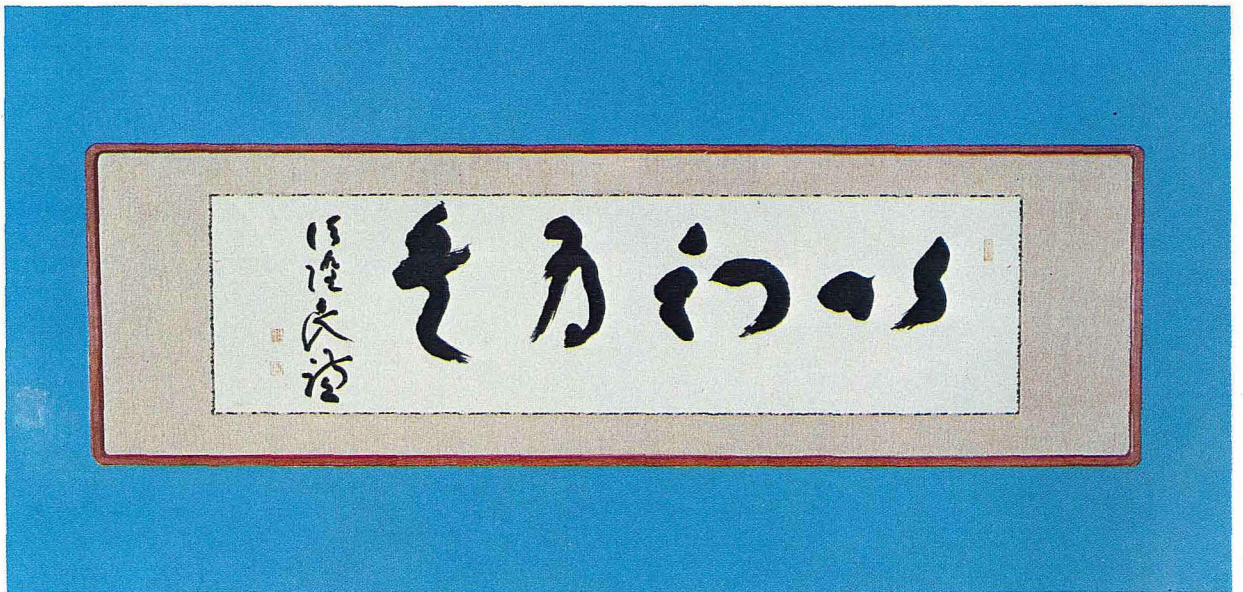
取締役 中 村 年夫

取締役 伊 奈 重熙

常任監査役 伊 藤 重郎



大藏卿 松方正義書「信為萬事本」



法隆寺管長 佐伯貌下書「以和為貴」